

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第614号 平成25年9月20日

シマフクロウの会（2）

シマフクロウは、昔からアイヌの人々と深い関わりを持って来ました。

苫小牧博物館館長をされていた長谷川充氏によれば、シマフクロウの呼び名については地方のコタンによるアイヌ語のニュアンスに多少の違いがあって、大雑把に括ると以下の3つ位のグループに分類出来るそうです。

- ・シマフクロウを自分達の守り神、守護神とみている言葉として「コタンコロカムイ（村を守る神）」、「コタンコルチカップ（国を司る）」、「モシリコットカムイ（大地の神様）」等
- ・シマフクロウそのものを神様と見る言葉として「チカプカムイ・カムイチカップ（神の鳥）」、「ニヤシコロカムイ（木の枝にいる神様）」
- ・上記に当てはまらない言葉として「メナシチカフ（東の鳥）」や「ウン・コッチャネ・グル（世界の仲介者）」

長谷川氏は、「アイヌ語でこれ程多種多様な呼び名で呼ばれる鳥は他に例がなく、また、他の生き物にも見当たらない」とし、「その理由は分からないが、その分だけシマフクロウとアイヌの人々との関わりが深かった」のだろうと推測しています。

アイヌの人々にとってシマフクロウは、人間世界の守り神であり、熊と同様に重要な存在です。

アイヌの人々は、この世界には「アイヌモシリ（人間の世界）」と「カムイモシリ（神々の世界）」という二つの世界があると考えられて来ました。「熊送り」というのは、熊の姿に形を変えてこの世に使わされた神々を「カムイモシリ」に送り返す儀式であり、シマフクロウについても「熊送り」と同様「フクロウ送り」というのが行われていたといえます。

知里幸恵さんが纏めた「アイヌ神謡集」をご存知の方は多いと思います。その中に収められている「銀の滴降る降るまわりに」は大変有名ですが、今日私は、同じ「アイヌ神謡集」に収められている「梟の神が自ら歌った謡『コンクワ』」を紹介したいと思います。

それは、大凡次の様な物語です。

「かつては雄弁で鳴らした自分も今では衰え、年老いてしまった。ついでには、誰か雄弁で、使者として天国へ五ツ半の談判に行ってくれる者はないか」と私はいいます。

すると「鴉」や「山のかけす」が名乗って出て来るのですが、私が五ッ半の用件を語って聞かせる内に「鴉」も「山のかけす」も居眠りをしたりして役に立たず、腹が立って殺してしまいます。

最後に憤り深い態度で「川ガラスの若者」が美しい様子で左の座に坐ったので、私は五ッ半の用件を夜も昼もいい続けたところ、数えて6日目に天窓から出て天国に行ってしまう。

ところで、五ッ半の談判の用件というのは、人間の世界に飢饉があって人間達は今にも餓死しようとしている。どういう訳かと神様に問いただしたいというものです。

「川ガラスの若者」は、談判の結果を私に語って聞かせたところによると、人間達が鹿や魚を粗末に取扱っている事に怒った神様が、鹿も魚も取る事が出来ぬようにしているのだという事が分かります。

私は、人間達が、以後そんな事をしない様に、眠りの時、夢の中に教えてやったら、人間達も悪かった事に気付き、態度を改めたところ、また昔の様に鹿や魚を取る事が出来る様になりました。これを見た私は、もう何の気もありませんので天国に行く事にしよう。

以上が、「コンクワ」という物語です。

今絶滅の危機にあるシマフクロウは、「コンクワ」の主人公（梟の私）が人間の夢の中で警鐘を鳴らした様に、「このままでは人間の暮らしそのものが立ち行かなくなるぞ」と語っている様に感じています。

46億年という地球の歴史の中で、今一番繁栄しているのは人類の様に見えます。しかしよく現実を見れば、毎年膨大な面積の森林が消えて行く一方で砂漠は肥大化しつつあります。また、オゾン層の破壊や温暖化の影響、更には、動物の乱獲等により地球上の生態系は大きな影響を受けており、多くの種が絶滅し、今もなお、多くの種がこの地球上から消えようとしています。この様に、地球は、人間の営みによって加速度的に破滅に向かっているといても過言ではありません。

シマフクロウの置かれている現状は、まさにその事の警鐘に外なりません。未来に生きる人々の為に、美しい地球を如何にして残すかは、今に生きる私達の大きな責任です。

山本氏は講演の中で、「シマフクロウにとって住みよい北海道は、人間にとっても住みよい土地となる筈だ」と述べておられます。地球は人間だけのものではありませんから、自然との共生なくして人類に明日はないという事だけは、明らかだと思います。（塾頭：吉田 洋一）